

中学を卒業し日本橋某百貨店に就職した私が初めて出会った笛は、エスカレーター係として「お足元にご注意ください」「ベルトにお掴まりください」と唱えながら耳にした楽器売場から聞こえて来る笛の音でした。楽器売場では 1 人のおじさん店員が小さな竹の笛でタンタカタカタタンタカタカタ タンタカタカタターとカルメンのフィナーレを吹いていました。これはバンブルートと云いおもちゃのような笛でしたが、6 穴と 8 穴とがあり、初月給で安い方の確か 100 円ぐらいだったと思いますが 6 穴バンブルートを買いました。これは間もなくヒビが入ってしまったので奮発して今度は 8 穴の方を買ひ、近くの定時制高校に通っていた私はその屋上で毎夜アンニーローリーとかダニーボーイなどを吹きまくっていました。

その後 2 年弱で百貨店を辞め、アルバイトをしながらラジオの音楽番組で様々な音楽を聴いている内にアンニーローリーではもの足らなくなり、バッハの管弦楽組曲第 2 番（ピアノ伴奏）の楽譜を買ひ、それをバンブルートで吹いていましたが音域が足りず、本物のフルートが欲しいと思うようになりました。

高校卒業後、日本電信電話公社（今の NTT）に就職し電話交換手として働きながらフルートを買うべくお金を貯め、21 歳の時昔ラジオで聞いた林リリ子氏の教えを受けたいと思い、ずうずうしくも電話帳で調べた番号に電話しました。先生はイツイツいらっしゃいと軽く云ってくださったので胸を弾ませて先生のお宅に伺うと、あなた誰？お電話した佐藤（私の旧姓）です。あ、他の佐藤さんと間違えちゃった。でもこれも何かの縁でしょうから普通は紹介者がいなければ教えないのだけれど内弟子の人から教えてもらいなさい。という訳で先生の紹介で憧れの本物のフルートを買ひ内弟子さんから手ほど

きを受ける事になりました。半年ほどして先生から今度から私のところへいらっしゃい、とお声が掛かり、北海道から九州まで沢山のお弟子さんを抱えた大先生の教えを受けられる幸運をつかむ事が出来たのです。

厳しいレッスンをしてくださる林先生には約 10 年間師事し私も人に教える立場になりましたが、寝たきりの姑の介護のためレッスンに伺うことも間遠になった頃先生は 48 歳で癌のため早世されました。



クラシックだけでなくジャズも好きだった私に、ある時アメリカのジャズフルーティストのハービーマンのレコードをオープンリールに録音してくれた人がいて、"Comin' Home

Baby”と”Summertime”をテープが擦り切れるほど聴き、それを譜面に書き写しました。ハービーマンが来日しコンサートを聴きに行った時、楽屋にその楽譜を持ってサインをお願いすると彼はびっくりして、レコードを聴いてコピーしたの？ Wonderful！とその譜面にサインしてくれました。今でも大切に持っていますが茶色く変色してしまっています。

何とかアドリブが吹きたいと思っていた頃、テレビでアメリカから帰国したばかりの渡辺貞夫氏の演奏を聴き、又厚かましくもこの人に教を乞いたいと彼のライブが行われた新宿のピットインへ行き、休憩時間の彼を捕まえてアドリブを吹きたいので教えてくださいと言うと、じゃ、今度うちへ来なさい、と云うことでお宅へ伺う事になりました。ではFで何か吹いてごらん、と云われて何も吹くことが出来ず恥ずかしくて下を向くばかり、まずはジャズ理論を学ぶため渡辺先生の教室に通う事になりました。毎週月曜日の夜、寝たきりの姑と5歳の息子に夕食を食べさせてから恵比寿まで2年間通いました。これが今でも編曲するのにとても役立っています。結局私のアドリブは即興ではなく四苦八苦の末出来たものを譜面に書くというアドリブとは似て非なるものとなってしまっています。その時の同級生にジャズとクラシック両刀遣いのフルーティスト中川昌三氏がいて、今でも時々彼のライブを聴きに行っています。

昭和53年、16年寝たきりだった姑が亡くなり、その年の8月に設立された我孫子市民フィルハーモニー管弦楽団に入団し、17年間在籍しました。それまでフルートとピアノ以外の楽器と合奏した経験がなかったので新鮮な感動の連続でした。レコードで聴き知っていた音楽とフルートのパート譜に書かれている音符の差があまりにも大きく愕然としました。まずベートーベンの「運命」の出だしが8分休止符だとは全く知りませんでした。ブラームスの交響曲でも小節の頭からのメロディーだと思っていたのがやはり休止符で次の音がシンコペーションになっていたり、メロディーの裏に美しいメロディーが隠されていたり、知らない事ばかりでこれは大変とスコアを買ってにらめっこ。曲によっては途中で30小節以上も休みで出るところが分からなくなったり、一番ひどいのは「カヴァレリアスチカーナ間奏曲」、フルートは一番最後の高音のラの伸ばしだけであとは全部休みです。又管楽器は水滴がキーの内側に溜まるとキーが塞がった状態になり、長調のメロディーが短調になってしまったりする事があります。これが本番の時だったりすると大変です。終演後の打ち上げで大笑いする話の種になります。

我孫子フィルでは副団長という名の下、雑用係で大変忙しい時期を過ごしましたが、時折フルートパートのみでする合奏の鈴を振るような音色に魅せられて何としてもフルートだけのアンサンブルを作りたいと、還暦を機に我孫子フィルを退団し、フルートアンサンブル「笛吹きたち」を立ち上げました。メンバーは我孫子フィルのフルートパートとその知人、私のお弟子さんなどでしたが、回を重ねるにつれプロ級のメンバーが増え、今では殆ど音大卒のメンバーでセミプロを自任するフルートアンサンブルになりました。ここでも私は代表兼雑用係兼編曲係として存在しています。

フルート属としてピッコロ、コンサートフルート(普通のフルート)、アルトフルート、バスフルート、コントラバスフルートという編成で活動していますが、この編成用の楽譜は極端に少ないため自分で編曲しなければなりません。管弦楽曲やピアノ曲からフルートアンサンブル用に編曲するのは大変ですが又楽しいものです。編曲はキーボードを使って音符をパソコンに打ち込むのですが、手書きと違って訂正したり同じものをコピーしたり小節を挿入したりが簡単に出来るので、試行錯誤が多いダメな編曲者の私には本当にパソコン様様です。そして自分が編曲したものが音になって再現される、それを聴く時の喜びは何とも云いようがありません。又出版もしていますので私の全く知らない所でコンサートの演目に私の編曲したものが取り上げられているのを知った時は感慨も一入です。

今はフルートを吹くことよりフルートアンサンブルのための編曲をすることの方が楽しくて、後は長くもない人生ですがこれに命を賭ける位の意気込みでいます。ボケなければの話ですが・・・。



フルートアンサンブル「笛吹きたち」

フルートアンサンブル「笛吹きたち」は1995年に千葉県我孫子市で産声を上げ、「第23回 笛吹きたちのコンサート」まで毎年1回コンサートを開き、レベルの高いフルート・オーケストラを目指して練習に励んでいます。メンバーはプロ、アマ入り混じっており、殆どがアマオケや吹奏楽団でも活躍しています。

メインの編曲は高間吉子が行っています。



「椿 姫」演奏中(全員)